## 一　お笑いバトル開戦

　宇宙は膨張し続けていた。その影響で、アンドロメダ星雲が動き始め、銀河系に向かってきだした。銀河系星人たちは、宇宙の膨張を抑えるため、巨大な冷凍機を稼働させたり、アンドロメダ星雲の軌道を変えようと、アンドロメダ星雲に向かって、強風を当てたり、地球の万里の長城にならって宇宙長城を建設するなど、様々な試みを行ったが、全て徒労に終わり、アンドロメダ星雲は引き続き、銀河系に接近してきていた。もはや、衝突は避けられない。

　銀河系星人たちの中には、銀河系から脱出しようとする者たちもいたが、ほとんどの者は、住み慣れた.星を去ることができなかった。銀河系に残ることを決意した者たちは、最終手段として、笑い声で、アンドロメダ星雲を吹き飛ばそうと考えた。宇宙の膨張には、笑いの膨張で対抗しようとしたのだ。本音としては、笑うしか、残された手段はなかっただけなのだが。

　もちろん声で、星を飛ばすことはできない。笑い声で電気を起こし、強大な扇風機を回し、その風で、星雲を吹き飛ばすことはできないまでも、軌道を少しでも変えれば、と期待し、願ったのだ。

　銀河系の星すべてに、巨大な扇風機が整備され、その羽はアンドロメダ星雲に向けられた。
後は、この扇風機を回す電気だ。その電気を起こす笑いだ。地球に会場が設けられ、他の銀河系の星の会場や家庭にもその映像が流れるよう、準備された。また、地球の会場には、銀河系各地のお笑い芸人の言葉が翻訳できる全銀河系言語翻訳機も備え付けられた。これで、銀河系の全ての人がお笑いを理解できる。後は、主役のお笑いの芸人たちだ。

　銀河系各地、いや宇宙各地から、よりすぐれた芸人たちが自薦、推薦で集められた。そして、その中で選ばれたお笑い芸人たち。それぞれの星の威信をかけて、かつ、銀河系を守るために、宇宙を守るために、今、まさに、お笑いバトルが始まった。

## 二　夫婦漫才　七夕織姫・彦星

笹の葉さらさら、落ち葉に揺れる、お星様、キラキラ、のお囃子にのって、男と女の二人が舞台の真ん中に登場した。舞台の裾には、夫婦漫才　織姫・彦星の名札がかかる。

「はあい、皆さん、こんにちは」
「何、言ってんねん。今は、夜やで。こんばんは、や」
「はあい、皆さん、こんばんは」
「いやに、今日は、素直でんな」
「それより、自己紹介や」
「あっ、忘れてたわ」
「わてが、七夕彦星です」
「わたしが、七夕織姫です」
「二人合わせて、棚からぼたもちです」
「誰が、棚からぼたもちや。七夕や。七夕織姫や。ぼたもちやあらへんで。それに、こんな、べっぴんさんつかまえて、ぼたもちやないで」
「悪い、悪い。つい、ほんまの事、言うてしもうた」
「何がほんまのことや。よけい、悪いわ。それに、もう漫才、始まっとんかいな。最初の挨拶がないで？」
「それでは、皆さま、少しの時間、お付き合いいただきたいと思います」
「よろしくお願いします」
「それにしても、織姫さん、久しぶりやなあ」
「久しぶりやて、この前、会ったばかりでしょう」
「この前や言うても、一年前やで」
「何、言うてんのん。わたしら、宇宙に住む者にとっては、一光年が一年みたいなもんや。人間の言う一年なんて、一秒にも当たらんで」
「そりゃそうやけど、ここは地球やから、一年は長いんとちゃうか」
「一年もあっと言う間や。知らん間に百年が来て、あんたは、あの世やのうて、宇宙行きや」
「なんや、お前。今日は、いやに突っかかるなあ」
「突っかかってないで。ほんまのこと言うとるだけや。それよりも、あんた、わたしに会いたかっただけとちゃうか」
「そんなことあらへん」
「ほら、年甲斐もなく、顔が赤うなっとるわ。そりゃ、わたしは、宇宙一べっぴんの織姫様さかい、いろんな人からちやほやされているんで、あんたが心配するのも無理ないわ」
「いや、無理はしてないで」
「人間、いや、宇宙人は素直にならなあかんで。会いたかったら、会いたかったって、ストレートに言わな。わたしら、結婚して、何年になるんかいな」

「何年やったろ。もう忘れてしもうたわ」
「何をとぼけとんのや。それとも、頭がもうろくしとんだけかいな」
「相変わらず、きついなあ」
「これぐらい言わな、あんたにはわからんのや。それなら、出会った時のことは覚えてまっか」
「それは覚えとるわ。確か・・・」
「確かやて、情けないなあ。そんなうろ覚えでは困るわ。お客さんが不審がるやろ。そんなんやったら、あたしが説明するわ。確か・・・」
「お前も言うとるやないか」
「あたしはええねん。数億の男どもから求愛されたんや。いちいち覚えとったらきりないわ」
「なんやそれ。そんな話、初めて聞いたわ」
「あんたのこと思って、今まで、黙っとったんや」
「それなら、死ぬまで黙っとって欲しかったわ」
「あんたがカバに後ろ向きに歩かせて、車を引きながら、荷物を運んどって、柳の下で、日傘をくるくる回し取るわたしに一目ぼれしたんやったんかいな。ああ、あの時の感動が思い出されるわ」
「何、一人で身もだえしとんのや。俺が連れとんたったんは、カバやないわ。牛や。それに、なんで、俺がカバに後ろ向きに歩かせなあかんのや」
「それは、あんたがバカやからや」
「そんな落ちかいな」
「お後がよろしいようで」

　二人が舞台から去った。拍手が鳴る。司会者が舞台の真中に立つ。
「さあ、今のお笑いはどうでしたでしょうか。さあ、お笑い電気はどの程度、発電されたでしょうか。さあ、発電量を見てみましょう」
　舞台の上手に電光掲示板が映し出された。
「十笑いです。残念。これでは、銀河系の全ての扇風機が一回転しか動きません。アンドロメダ星雲の流れ星さえ、防ぐことはできないでしょう。このままでは、銀河系の命運はどうなるのでしょうか。それじゃあ、次のお笑い芸人に期待しましょう。さあ、次の芸人は・・・」

　舞台の上では、司会者が賑やかに騒いでいる。彦星は織姫に目もくれずに、楽屋から立ち去ろうとする。
「今日の仕事はこれで終わりやな」
　彦星は織姫の顔も見ずに言う。
「そうです」
　織姫が彦星の背中に頷く。
「ほな、帰るで」

「あんた、得点は気にならんの」
「そんなもん、どうでもええわ。第一、笑いで電気をおこして、それで扇風機を回して、アンドロメダ星雲をどこかに吹き飛ばそうなんて、最初から、無理な話や。それこそ、漫才や。お笑いや」
「そりゃそうやけど。それやったら、なんで、あんた、この舞台に立ったん？」
「客を笑うためや。わしは漫才師やけど、客を笑わせても、自分は笑われてはないで。客を笑うために、この舞台に立ったんや。ほんまに、笑いでアンドロメダ星雲を吹き飛ばそうと考えとる奴がどれだけおるんかと、その客のバカ面を見に来たんや。ほんなら、客席は満杯や。一体、どうなっとんのや。明日にでも、この地球が、銀河系が吹き飛ばされるんやで。なんで、みんなは逃げもせんと笑うとるんや。ほんま、お笑いや。末期的症状や。今日は、ほんまに笑わせてもろたわ」
　彦星は黒い言葉を吐き捨てた。
「そんなこと言うたら、お客さんに失礼やで。お客さんは、笑いに来とんのや。そのお客さんを笑うなんて、どうかしとるで。あんた」
「まさか、お前まで、笑いで、アンドロメダ星雲を吹き飛ばせると思うとんのか？」
「わたしにはわかりやしません。ほんでも、このまま何もせんままというわけにはいかんのと違いまっか。わたしらは、漫才師でっせ。お客さんが笑いを求めとんのやったら、どんな状況でも、どんな理由でも、舞台に立たなあかんのと違いまっか。お客さんに笑うてもらわなあかんのと違いまっか」
　彦星は横を向いたまま黙っている。
「あんた、何か、あったんかいな。わたしら、夫婦漫才やで」
「夫婦は舞台の上だけでたくさんや」
　先ほどの舞台の上とは違って、冷たい態度の彦星。
「そない言わんでも、ええやんか。もうすぐアンドロメダ星雲がやってくるんやで。ぶつかったら、あんたも、わたしもこっぱ微塵や。それやったら、もうちょっと一緒にいようよ。晩ごはん、まだやろ。近所に、美味しいお好み焼屋を見つけたんや。熱いお好み焼を、二人で、ふうふうしながら食べよ」
「何がお好み焼屋や。それに、何がふうふうや。もう、漫才は終わったし、わしら二人は夫婦も終わったんや。今さら、やさしい言葉を掛けられてもう手遅れや」
「そんなことないで。アンドロメダ星雲がぶつかってくるんで、こうして、銀河系の人々が一致協力して、笑いで世界を救おうとしているんやおまへんか。何でも手遅れなことははありまへん。ここであきらめたら、それこそ終わってしまいます。なあ、あんた」
　彦星の体にすがりつく織姫。
「うるさいわ。笑いで、アンドロメダ星雲がどこかに行くと思うとんのか。そんなんマンガや、漫才の世界や」
「あたしら漫才師やで」
「そういう意味やない。言葉だけでは、アンドロメダ星雲の方向は変えられんというこっちゃ。

世の中には出来ることと、出来んことがあるんや。出来んことに、いつまでもしがみついていて、どうするんや。ええい、離さんか」
「それでもええのんや。アンドロメダ星雲がやってきてもええのんや。あたしは、あんたにしがみつきたいんや。ひょっとして、あんた、まだ、あのさそり座の女とつきあっとんのか？」
「もう、別れたわ。俺の大事な牛に一刺ししやがって。そのせいで、俺の大事な牛は死んでしもうたわ。宇宙警察に届けたけど、あの女、銀河系から、別の星雲へ逃げたらしいわ。アンドロメダ星雲かもしれん。くそ」
　ふてくされ、空の彼方を見上げる彦星。
「ほな、わたしともう一度、やり直そう。あんたの子どもの太郎も待ってるで」
　その時、強風が襲い、街全体が大きく揺れた。アンドロメダ星雲の流れ星が地球の側を通り抜けたのだ。ビルはギッコン、バッタンとシーソーのように揺れ、ビルの中の人々は多勢に無勢と転がり続けた。地上の人々は眠たくもないのに地面に転って、つかの間の休憩を楽しんだ。そんな中でも、織姫は強風にも、何事にもびくともせず、仁王立ちのままだった。
「うわー」
　彦星は膝まづいて、織姫の胸にすがりつく。
「わし、昔から、お化け屋敷やジェットコースター、コーヒーカップが苦手なんや」
「そうか、そうか」
　織姫は彦星の頭を、髪の毛を、背中をさする。
「もう大丈夫やで。流れ星は行ってしもたで。あたしがおるから大丈夫や。さあ、あんた、家へ帰ろう。あんたの家へ帰ろう」
　彦星と織姫は手をつなぎ、仲睦まじく家に帰るのであった。

## 三　従兄漫才　火星人・木星人

　お囃子の音が、クラッシックに変わった。曲はホルストの「惑星」だ。当然、次に登場したのは、火星人と木星人だった。

「はあい、みなさん、こんにちは」
「こんにちは」
「私が、火星人です」
「私が、木星人です」
「二人合わせて」
「寡黙（火木）な人です」
「こら。漫才師が、寡黙やったあかんやろ」
「いや、黙っとって、お金が貰えるんやったら、それにこしたことがないで」
「そりゃ、そうやけど、俺たち、漫才師やで。お客さんに笑って貰って、なんぼや」
「黙っとって、笑って貰えたら、一挙両得や」
「何が、一挙両得や。勝手なことばかり、言うて」
「ほら、客席のあっちの隅のお客さんが笑うてくれたで」
「それは、あんたが、変な顔をするからや」
「変な顔はしていないで。普通の顔や」
「ええなあ。笑いの最終兵器を持っとって」
「誰が、笑いの最終兵器や。素顔や、素顔。生まれつきの顔や。ほっといてくれ」
「それはそうとして」
「何が、それはそうとしてや。このままでは、俺の顔が変な顔というイメージのまま、お客さんが家に帰ってしまうがな」
「しつこいなあ。どないしたらええんや」
「ほな、もうええわ」
「なんや、いやにあっさり引き下がったなあ」
「それはそうとして、私ら、実は、従兄ですねん」
「そう、実は、従兄ですねん」
「何、全然、顔が似てないって」
「そうですねん、顔は全然似てないですね」
「なあ、火星人。なんで、あんた、タコみたいなん」
「誰が、タコや。俺がタコに似とんじゃなくて、タコが俺に似とんのや」
「一諸のこっちゃ」
「それに、わたしらをタコ呼ばわりしたんのは、地球人や。地球のＳＦ作家が、勝手に、火星にはタコに似てる生物がおるって書いたから、そのデマが、今も伝えられているだけや。このわた

しのどこがタコなんや」
「頭がつるつるで、口から墨を吐いて、手足が八本あったら、誰でも、タコやと思うで。ほら。」　木星人が魚類図鑑を取り出し、観客に見せる。
「ほんまや。そっくりや。誰が勝手に、俺の写真を載せたんや。わしは許可しとらんで。肖像権の侵害や。モデル料くれ」
「自分でタコと言うて、どないするんや」
「それはそうとして、あんたはどうなんや。なんや、腰の周りに、輪っかをつけて、回り続けとんや。それ、フラフープかいな。そんなんしとったら、疲れるやろ。目も回るやろ。目が回らんまに、借金返してたあ」
「誰もあんたに、金は借り取らんで」
「もちろん、俺もあんたには金は貸し取らんわ。親子でも金の貸し借りだけはするなって、親の遺言やから」
「親が死んどんのやったら、親子で金の貸し借りはできんがな」
「ほやから、遺言や言うとるやろ」
「ほんでもいつ、お前んとこの親が死んだんや。親戚のうちの親には連絡がなかったで」
「そりゃそうや。まだ、死んどらんわ。ちゃんと元気に生きとるわ」
「ほな、さっきの遺言の話は嘘か」
「お話、お話。俺ら漫才やっとんでや。ほんまの事ばっかり、言うわけないやろ。お客さんが喜んでくれたらええんや」
「そりゃそうやな。それでも、俺らが嘘ばっかりついとるように思われるで」
「心配せんでもええ。お客さんは、この会場出たら、ああ、おもろかったなあと呟いて、話のネタは全て忘れてしまうんや。あんまり心配やったら、おまじない掛けてやるわ。チチンプイプイ。全て忘れてえたあ」
「それ、おまじないやのうて、お願いやなあ。まあ、借金の話はおいておいて、あんたこそ、ほっといてたあ。木星の周りに、小惑星が回っとるから、木星人も、おんなじように、腰に、輪っかがあると地球人が、勝手に想像しとんのや。その想像を壊さんように、こうしてフラフープを常に回しとんのや。ここが木星人のやさしさや。よう、覚えといて」
「なんや、やさしさの押し売りみたいやなあ。それにしても、ほんまに、何も知らん奴は、困るなあ」
「ほんまや。ほんまに困るわ」
「まあ、それでも、そのお陰で芸ができるんやけど」
「そうですねん。この火星人、この八本の手足を利用して、曲芸ができますねん」
「曲芸やて、いやに古臭い言い方やな」
「古臭い方が、伝統や歴史があるように聞こえるやろ。ひょっとしたら、宇宙遺産と言うても間違いないで。何でも、物の言い方ひとつや」
「宇宙遺産とは大きく出たな。まあ、ええわ。それなら、早速、芸を披露します。はい。まずは、お手玉から」

「・・・・」
「次に、傘を開いて、傘の上でこの毬を回します」
「・・・・」
「はい。次は、瓶を十六本回します」
「・・・・」
「はい。次は、額の上に、ビール瓶五本を縦に乗せます。上手くいったら、拍手を」
「・・・・」
「はい。上手くいきました。拍手をお願いします。できれば、おひなりもお願いします」
　拍手が鳴る。おひねりがパラパラと舞台に蒔かれる。それを拾う木星人。その様子を見て、突然、芸をやめた火星人。
「ちょっと、待て。俺ばっかり、芸をして、あんたは何もしてないやないか。おまけに、おひねりまで独占して。これで、ギャラはおんなじ半分かいな」
「わたしが頭脳、あんたが手足。わたしがしゃべり、あんたは寡黙」
「もう、ええわ」
「失礼しました」

　火星人と木星人は舞台から去った。再び、司会者が登場した。
「さあ、今の笑いは何笑いでしょうか。電光掲示板に注目しましょう」
　舞台の客も、この放送を見ている全銀河系の人々も注目する。
「でました。百笑いです。さっきの十倍ですが、これでも、流れ星を吹き飛ばす程度です。相変わらず、アンドロメダ星雲は、銀河系に接近してきています。この銀河系を救うお笑いヒーローは、一体誰なのでしょうか。ここで、銀河系を救えば、銀河系栄誉大賞が授与されることは間違いありません。期待がより一層高まります。さあ、次のお笑いヒーローは・・・」

　楽屋で、中継を見ていた火星人と木星人の二人。
「残念やなあ。百笑いやったわ」
「まあ、それでも、さっきの組の十倍やろ。アンドロメダからの流れ星ぐらいは避けることができるんで、よかったんとちゃうな。そう言えば、さっき、流れ星が地球の側を通りぬけたんやろ。劇場も大いに揺れたなあ。それを避けることができるんやったら、俺らも何かの役に立っとるということや」
「それは、そうとして今日の調子はどうやった？」
「まあまあやなあ」
「お手玉もビール瓶も、落とさんと上手く乗せられたやないか」
「まあ、プロやさかい」
　言葉と裏腹に胸を張る火星人。
「ついでに、その傘の上やのうて、掌に、おじゃみみたいに、アンドロメダ星雲は乗せられへんのかいな」

「そんな、乗せられるわけないやろ。アンドロメダ星雲やろ。大きすぎるわ。体がつぶれてしまうがな」
「いやあ。宇宙には重力がないよって、できるんかと思うたんや」
「それに、アンドロメダ星雲を乗せてどないすんのや」
「いやあ、アンドロメダ星雲を手玉に取ってやろうかと思って」
「それ、おもろいねん。今度の舞台で、そのネタを使おう」
「ほな、アンドロメダ星雲とそっくりのおじゃみを、その器用な八本の手足で作ってたあ」
「よっしゃ、作るわ。ほんで、あんたは何すんのん？」
「俺か。俺ははまた、ネタ考えるわ」
「やっぱり、あんたが頭で、わたしは/が手足やなあ」
「もうええわ」
「お後がよろしいようで」
　火星人と木星人は楽屋で大笑い。この声が聞こえたのか、舞台の笑いの電光掲示板が、ピッという音とともに百笑いから百一笑いへと変わった。司会者もお客さんも、誰も気がつかない。
「舞台もはねたことやし、これから、一杯、どうや」
「そりゃ、ええなあ。なんか、また、新しいネタを考えようか」
「傘の上で、お銚子とおちょこを回すんはどうや？」
「そんなん、簡単でっせ。ついでに箸も皿も回せますわ」
「その芸を居酒屋の店主に見せて、目を回させよか」
「目を回させて、どないすんのん」
「その間に、金を払わんと逃げるんや」
「それは、喰い逃げやろ。それも、漫才のネタかいな。俺ら、いつも、ネタばっかり考えとるなあ」
「寝ても覚めても、お笑い、お笑いや」
「あら、何、目をつぶってのん？」
「いやあ、ネタフリしてんのんや」
「上手いんなあ。あんたはんの、漫才にかける情熱には頭が下がるわ。一生、手足として着いていくわ」
「いやいや、あんたがおるさかい、俺のネタが披露できるんや。これからも二人仲良く、漫才をやっていこう。景気づけに、ケーキ屋へ行こう」
「居酒屋やないんでっか」
「俺は酒が飲めんのや。アルコールが一滴でも入ると、顔が真っ赤になるんや」
「それは、俺のことやろ。顔だけやのうて、体全身が真っ赤になりまっせ。せやから、おでん屋だけは、勘弁して欲しいわ。共食いになるから」
「よっしゃ、わかった。やっぱり、居酒屋や。アンドロメダ星雲がやって来る前に、もっとネタを考えよう。いこう」

「いきまひょ」
　二人は仲好く、劇場を後にした。

## 四　兄弟コント　北斗七星ブラザース

　次に登場したのは、ギターやベースなど楽器を持った七人組だった。ただし、一人だけ、楽器じゃなく、ノコギリを抱えていた。

「はい、みなさん、お待ちかねの、北斗七星ブラザースです」
「アチャー。アチャ、アチャ、アチャ、アチャ」
「お前たちは、既に笑っている」
「こら。お客さんに、お前とは、失礼な」
「ほんま、こいつら失礼や。折角、笑わせようとしているのに、くすりともせえへん。くすぐってやろうかいな。それとも、笑い薬まいたろか」
「お客さんをくすぐってどないするんや。それに、薬はいかん。笑い薬は、銀河系では禁止されとんのや。危険ドラッグや。笑取に捕まってしまうで」
「しょうとり、って、鳥が笑うんかいな」
「字が違うがな。笑う鳥やのうて、笑い薬取締官、略して，笑取や。どんなに、笑いのネタに困っても、薬に頼ったらあかんで」
「でも、客が笑わんさかいなあ」
「それは、お前のネタがつまらんからや。もっと、勉強せえ」
「そうかいな。体を張った笑いやと思うけど」
「体を張る意味が違うわ」
「自己紹介が遅れました。私が長男の北斗一星です」みんなからはずれ、舞台の隅に移動する。
「俺が、次男の北斗二星です」ギターを鳴らす。
「三男の北斗三星です」ベースを鳴らす。
「四男の北斗四星です」ドラムを叩く。
「五男の北斗五星です」キーボードを弾く。
「六男の北斗六星です」トライアングルを鳴らす。
「末っ子の、北斗七星です」リコーダーを吹く。
「全員で、北斗七星ブラザーズです」
「たくさんの拍手、ありがとうございます」
「兄ちゃん。たくさんや言うても、お客さん、六人しかおらんで」
「六人やったら、お客さんよりも、舞台の上の俺たちの方が多いやないか」
「お客さん。よっぽど、暇なんやなあ」
「こら、失礼なこと言うたらあかん。みんな、行くとこないんや」
「あんたの方が失礼やで」
「ほな、拍手合戦したら、一人差で、僕たちの勝ちやな」
「お客さんと拍手合戦して、どないすんのや。それに、勝ったら何かええことあるんかいな」

「何でも、勝ったら嬉しいやろ」
「何や、それだけかいな」
「まあ、それはおいておいて。最近、アンドロメダ星雲が近づいてきてますなあ」
「もうすぐ、この銀河系とぶつかるそうですわ」
「もうすぐやて言うて、いつや」
「あと、百年先だそうです」
「だいぶ先やな」
「そんなことありまへんで。一年や言うたら、あっという間でっせ。十年だったら、あっ、あっ、や。百年やったら、あっ、あっ、あっ、や」
「単に、あっ、の回数を増やしとるだけやないか」
「ほんでも、ぶつかるんは間違いないで」
「ぶつかったら、どないなるん？」
「地球や銀河系はこなごなや」
「そりゃいかん。どないかせなあかんわ」
「どないしたらええん、兄ちゃん」
「アンドロメダ星雲を吹き飛ばすんや」
「どないして？」
「銀河系の全ての人が、アンドロメダ星雲に向かって、息を吐くんや」
「息を吐くときは、歯を磨いとったほうがええんかいな」
「嫌に、細かいな。そりゃあ、歯を磨いとったほうがええわな。相手に失礼やないわ」
「逆に、息が臭い方が、相手が逃げるんとちゃうか」
「あほ。相手はアンドロメダ星雲や。生き物やないで。息が臭いからといって、方向は変わらんわ」
「ほな、どないすんのん？」
「せやから、わしが説明しとるやろ。アンドロメダ星雲に向かって、息を吐くんや」
「せえのって？」
「そうや」
「ほな、どないなるん」
「銀河系に住んでいる人全員の息や。そりゃ、ごっついで。アンドロメダ星雲が吹っ飛ぶわ」
「そりゃすごいわ」
「そうやう。ええ考えやろ」
「ほんでも、息を合わすんは、なかなか難しいんとちゃうか」
「ほなけん、笑いや。われわれとお客さんが一緒になって笑えば、その笑い声が強風となって、アンドロメダ星雲を吹き飛ばすんや」
「そりゃ、おもろい。ええ考えや」
「みんなでやってみよ」

　兄弟たちがあれこれと言い合っていると、おもむろに長男がのこぎりを持って、舞台の真ん中に立つ。
「あんちゃん、どうしたんや。今まで、漫才に参加せんとったくせに、急にのこぎりなんか持ってきて。それに、それ、のこぎりを宇宙共通語に翻訳しても、銀河系の人はわからんのとちゃうか」
「のこぎりはのこぎりやないか。こうやって、人を切るんや」
　長男が次男の胴を切ろうとする。
「あんちゃん、やめてえなあ。次男を切ったら、次男が二人になって、兄弟がもう一人増えて、ギャラの取り分が減るで」
　三男が慌てて、止めに入る。
「そうか。それなら、やめとこ」
　長男は次男の胴からのこぎりをはずす。
「ちょっと、待てえ。何や、ギャラのために、わしを切るんをやめるんか。可愛い、弟のことが心配やないんか」
　次男がいきり立つ。
「何を言よんや。心配しとるで。お前の取り分が増え、わしの取り分が減るんが心配なんや」
　長男が逆ギレする。
「意味が違うわ」
　次男は怒って、みんなから離れ、舞台の隅に行く。長男は、そんなこと気にしないで、舞台の中央に立つ。
「今まで、おまえらの話を聞いとって、わしが一言、感想を言おう」
　やおら、のこぎりから音を出す。
「キーキー、やかましい音やなあ」
「それ、楽器のつもりか」
「音で、言葉にしたんかいな」
「ほんだら、何て言うたんや」
「兄ちゃん、わからんわ」
　弟たちが口ぐちに叫ぶ。
「よう聞け。もう、一回鳴らすけんな」
　長男がノコギリを震わしながら、
「お・ま・え・ら・あ・ほ・か」
と、マイクに向かってしゃべる。
「ほんま、のこぎりの音がそう聞こえるわ」
　弟たちが頷く。それに合わせて、観客が一斉に笑う。
「ほら、この笑い声で、アンドロメダ星雲も吹っ飛ぶやろ」
　長男は自慢そうに胸を張る。

「もう、一回、やるで」
　長男がのこぎりを引きながら、口からも声を出す。
「あ・ん・ど・ろ・め・だ・せ・い・う・ん・あ・っ・ち・い・け」
　弟たちも一斉に声を合わせる。
「さあ、お客さんも御一緒に」
「あ・ん・ど・ろ・め・だ・せ・い・う・ん・あ・っ・ち・い・け」
　そこに、司会者から「北斗七星ブラザーズさん、持ち時間が過ぎました。速やかに舞台から降りてください」のアナウンスが入る。
「兄ちゃん。もうやめろと言われてるで」
「わしらが、あっち行けいということかいな。ちゃん、ちゃん」
　最後に、「北斗星ブラザーズでした」と、兄弟全員が声を合わした。

　北斗七星ブラザーズの七人が舞台を下りた。
「さあ、今の笑いはどうだったでしょうか」
　司会者がマイクを片手に、心配そうに電光掲示板を見る。数字が出た。
「千笑いです。これで、アンドロメダ星雲の一つぐらいの星は向きを変えられるでしょう。それでは、ネクストのコンビに期待しましょう」
　司会者が舞台から袖へと引っ込んだ。
　その頃、北斗七星ブラザーズの楽屋では。
「ほんまに、アンドロメダ星雲がぶつかってくるんかいな」
　のこぎりを持ったまま、長男が尋ねる。
「なんや、兄ちゃん、知らんかったんかいな。あんだけ、新聞やテレビ、ラジオ、チラシ、フェイスブック、ブログ、ツイッター、ホームページ、絵手紙、紙芝居、井戸端会議、交換日記で、報道しとるで」
「なんや、井戸端会議って。まだ、井戸があったんかいな。それに交換日記も懐かしいなあ。のこぎりを磨くのに一生懸命やったさかい、気がつかんかったわ」
「どれだけ、磨いとったんや。テレビぐらい、つけとったらええのに」
「そんな、ながら族みたいに、中途半端なことではあかんやろ。心を込めて、のこぎりを磨かなあかんのや。それに、わしの分だけやないで、おまえら兄弟の分を全部、磨いとったんや」
　長男が楽屋の隅から、六本のノコギリを持って来る。
「ほい。これが二男。これが三男。四男。五男。六男。七男や。ほんまに大変やったわ」
「兄ちゃん、ありがと。ほんで、このノコギリでどないすんの」
「どないすんのんって。みんなで一緒に演奏すんのや。ほら、やるで」
　兄弟七人が一斉に演奏する。
「お・ま・え・は・あ・ほ・か」
　ノコギリの歌がする。

「あっ、はっ、はっ、は」
　兄弟たちが笑う。
「もう一回やるで」
　兄弟七人が一斉に演奏する。
「あ・ん・ど・ろ・め・だ・せ・い・う・ん・あ・っ・ち・い・け」
「あっ、はっ、はっ、は」
　兄弟たちは、自分で演奏しながら大声で笑う。
「これでアンドロメダ星雲もどこかに吹っ飛ぶで」
「あっ、はっ、はっ、は」
　電光掲示板は、楽屋からの兄弟たちの笑い声を聞いて、一万笑いが表示された。アンドロメダ星雲のうち、十個の星が、あまりの馬鹿馬鹿しさに、銀河系から別の星雲に方向を変えた。
「さあ、みんな帰るで」
　長男が叫んだ。
「ほな、さいなら」
「さいなら」
　兄弟たちは、何事もなかったように、のこぎり片手に自分の家へとバラバラに帰って行った。

## 五　おじいさんと孫漫才

　舞台には、年寄りの男と若い女性が登場した。おじいさんと孫だ。

「はい。地球人です」
「私も地球人です」
「二人合わせて、地球人です」
「それがどないしたんや。落ちがないで。そのままや。じいちゃん」
「じいちゃんって呼ぶな。瞳。ここは舞台や。舞台の上では、祖父と孫の関係はないわ。漫才の相方の関係や」
「ほんでも、じいちゃんには変わりないで」
「なんや、それは年寄りと言うことかいな。わしは若いで」
「若い言うても、もう八十やろ」
「人間世界では、そりゃ、年寄りかもしれんが、宇宙の起源から言えば、若造どころか、赤ちゃんみたいなもんや」
「こんな文句を言う赤ちゃんがおったら、うるそうてしょうがないわ」
「赤ちゃんは例えや。でも、ほらみろ」
　おじいさんは口から入れ歯を取り出して、また、元に戻した。
「歯がないんは、赤ちゃんと一緒や」
「ほんまや。わがままなところ、自分勝手なところも、赤ちゃんと一緒や」
「ほっといてくれ。人間は生まれて、成長して、死ぬ前に、元に戻るんや」
「なんや、じいちゃん。もうすぐ死ぬんかいな」
「あほ言え。わしは死なんで、まだまだ、ぼやき続けなあかんのや」
「ほな、あたしも、一緒にぼやくわ」
「そうか。いやに、素直なや。その言葉に免じて、今日のところは勘弁してやるわ。それにしても、ほんま、最近、どないなっとんのや」
「どないや、言うて、どうしたんや」
「アンドロメダ星雲が銀河系にぶつかって来るという噂やないか。なんぞ恨みでもあるんかいな」
「恨みはないとちゃうか。ただ飛んでくるだけやろ」
「ただ飛んでくるんやったら、ちゃんと、目を開けて、ぶつからんように避けなあかんやろ。それが他人さんへの常識やろ」
「星には目はついてあらへんで」
「ついてなかったら、つけたらええやろ。わしがマジックで目を描いたろか」
「そんな無茶な。それに、マジックで目を描いても見えへんで」

「無茶なんは、ぶつかってくる方やろ」
「そりゃそうや。じいちゃんの言う通りや」
「どうしても、ぶつかるんやったら、慰謝料を持ってこい」
「そういう問題ではないんとちゃうか」
「この銀河系には、地球人だけでも何十億人も住んどるし、銀河系人なら数千億にも上るのに、迷惑やろ。人の迷惑考えとんのか」
「そりゃそうや。このままぶつかったら、地球がこなごなになってしまうわ」
「そうやそうや。こなごなや。わしも瞳も粉々や」
「小麦粉みたいに言わんとって」
「粉々になったわしと瞳を水で練って、焼いたら、たこ焼きや」
「あっちっちっち。熱うて、たまらんわ」
「瞳も、わしの話によう乗ってくれるな」
「そりゃ、じいちゃんの孫やから」
「まあ、そう言うことや」
「何が、どう言うことや。アンドロメダ星雲がぶつかってくることが気にくわんのやろ。じいちゃん」
「ほんまか。瞳。そりゃ大変や。はよ、逃げなあかん」
「何言よんな。アンドロメダ星雲がぶつかってくると言うたんは、じいちゃんやないか。ちょっとボケとんのとちゃうか」
「誰が簿毛や。毛が薄いんは通り過ぎて、このとおり、つるつるの人工太陽や」
「じいちゃん。その人工太陽のまぶしさで、アンドロメダ星雲をなんとかできんのかいな」
「そりゃ、ええこと言うわ。今度、光頭会のメンバーに相談してみるわ」
「コウトウカイ、て何？」
「光る頭の会や。わしのように、頭がこうごうしい者の集まりや」
「何やて。じいちゃんみたいに、口やかましうて、文句たれで、ぼやく奴がまだ他におるんかいな」
「誰が文句たれや。わしは自分に正直なだけや。他の奴は、思うことも言えんで、いじいじしているだけや。そんなんしとったら、体に悪いし、長生きできんで」
「じいちゃん、まだ、生きる気か」
「ああ、生きるで。瞳が結婚して、ひ孫を見るまで、生きとかなあかん」
「嬉しいこというてくれるけど、じいちゃんと一緒におったら、いい虫も、悪い虫も寄りつかんけど」
「そりゃそうやな」
「いやに素直やな」
「でも、頭が光るおかげで、いろいろと役立つこともあるんやで」
「何が役立つんや」

「この光を利用して、たこ焼き焼いたり、合図をしたりできるんや」
「ほんまかいな。じいちゃん、何やっとんのや」
「アンドロメダ星雲に、光で合図しとんのや」
「なんて合図や」
「たこ焼きはいらんかいな。たこ焼き欲しかったら、ここまでおいで」
「ここまで来たら、地球にぶつかってしまうがな」
「その時は、迷惑料代わりに、たこ焼き代をもらうがな。瞳にも半分やるわ。その代わりに、たこ焼きを焼くのを手伝ってくれよ」
「もうええわ」

　二人は舞台を降りた。舞台の裾から司会者が登場した。
「夫婦や兄弟の漫才師は多いですけど、祖父と孫のコンビは珍しいですね。さあ、得点の方はどうでしょうか。電光掲示板をご覧ください」
　舞台の上手の掲示板に得点が表示される。
「十万笑いです。一挙に、笑いがヒートアップしました。銀河系に向かってくるアンドロメダ星雲の戦闘部隊の第一陣が総崩れです。他の星雲に吹き飛んだことでしょう。たこ焼きで釣っておいて、餌に食いついた途端、吹き飛ばすやり方が成功しました。残るは、本体の総大将のみです。最後の登場は、銀河系一のお笑いスター・・・」

　じいちゃんと孫は寄席から出た。
「さあ、たこ焼きを食べに行こう。瞳」
「まだ、漫才が続いとんかいな。たこや言うたら、さっき火星人がおっつたで。あの火星人を食べるんかいな」
「あほ言え。あんな火星人喰うてどないすんのや。それに、火星人がたこ言うんは、地球人が勝手に考えた想像の生き物や。ほんまもんの火星人は違うで」
「でも、さっき舞台に立った火星人は、頭がつるつるで、手足が八本あって、どう見てもたこやったで」
「あれは着ぐるみや。お客さんの気を引くための仕込みや」
「なんや、そうかいな。それならほんまもんの火星人はどんなん？」
「それはわしも知らん。頭がつるつるで、手足が八本いううんだけは聞いとるけどなあ」
「それがたこなんや。じいちゃん、やっぱりボケとるで」
「誰が薄毛や。毛が薄いんは通り過ぎて・・・」
「もうええわ。それ、さっきの漫才の続きや。それよりも、じいちゃん。わたしは、たこ焼きよりもパフェがええわ」
「パフェが食べたいんかいな。それやったら、ええ店、知っとるで。アイスクリームの上にたこ焼きがのっとんのや」
「それ、やっぱり、たこ焼きや。それに、そんなん、まずいんと違うか？」

「アイスクリームのてんぷらもあるんやさかい、パフェの上のたこ焼きも美味しいんと違うか」
「ちょっと、話が違うと思うけど。それに、じいちゃん。もう、漫才は終わっとるで。たこ焼きにこだわらんでもええんとちゃうか」
「漫才は終わっとるかもしれんけど、生きていることは続いとるで」
「そりゃ、そうや。じいちゃんにしては、いやに真面目やなあ」
「何言よんかいな。わしは、これまでずっと真面目に漫才してきたで」
「そうやなあ、二十四時間、漫才人生やもんな」
「二十四時間だけやないで。三百六十五日漫才や」
「三百六十五日を八十年間続けているから、三万時間に近いんとちゃう」
「ええこと言うなあ。確かに、母親のお腹から生まれた時に、おぎゃあ、の代わりに、まいど、って言うたもんや」
「それは嘘やろ。二人だけで、漫才してどないすんのん」
「ほやから、二十四時間、漫才していると言うとるやろ」
「それって、疲れへん？」
「疲れてしもうて、もうよれよれや。ほなけん、栄養つけるために、たこ焼き食べるんや」
「そこかいな。そこに行きつくんかいな。ちょっと、無理があるけど、まあ、つきおうてあげるわ」
「なんや、急にやさしいなって。気色悪いな」
「アンドロメダ星雲がぶつかってきても、じいちゃん、一緒にいような」
「そりゃそうやけど。お前は若いからええけど、わしは年寄りやさかい、それまで命が持つかいな」
「持つ。持つ。憎たれ口叩く奴は、長生きするって、昔から言うてるで」
「それ、誉めとんのかいな。貶しとんかいな」
「もちろん、誉めてるで。でも、じいちゃんは、瞳にはやさしいから」
「なんや、ちょっと寂しくなってきたな」
「ほな、たこ焼き食べよ。体も心も、温かくなるよって」
「そうやな。ついでに、たこ焼き屋でも開くか」
「たこ焼き屋って、どこに？家の近所？」
「もちろん、アンドロメダ星雲や。銀河系にぶつかる前に、アンドロメダ星雲に飛び乗るんや。なら、ずっと、たこ焼き屋ができるで」
「漫才はやめるんか？」
「漫才は続けるわ。銀河系一から、アンドロメダ星雲一の漫才師になるんや」
「じいちゃん。夢が大きいなあ」
「夢だけやないで。態度もでかいで。たこ焼きもでかいほうが、お客さんも喜ぶやろ」
「それなら、アンドロメダ星雲よりも大きなたこ焼きを注文してもええかいな」
「もちろんや。ついでに、そのたこ焼きよりも大きなパフェを注文してもええで」

「じいちゃん。やっぱり、やさしいなあ。ほな、たこ焼き屋の下見に行こ」
　瞳はじいちゃんの腕を取ると、スキップしながら近所のたこ焼き屋に向かった。ただし、じいちゃんは二本しかない足がもつれて、よろけながら瞳に引っ張られるのであった。

## 六　再び、夫婦漫才

　　次に登場したのが、またまた夫婦だった。先ほどの織姫・彦星夫婦よりもやや年齢が上だ。その分、結婚生活も長いのだろう。その長さの分だけ、夫婦の顔や体つき、雰囲気までが似ていた。兄妹と言ってもよい。同じように生活をしていれば、例え、最初は赤の他人でも、青なのか、黄色なのか、紫色なのか、人によって色は異なるけれど、同一色の男女になるのだろうか。もちろん、今の話題は、今必要なことは、この銀河系を救うために、銀河系中の人々を笑わすことである。この夫婦が似ていようが似ていまいがどうでもいいことだ。とにかく、この夫婦の笑いに期待したい。

「さあ、お次は、笑い歴五十年の大ベテラン。夫婦歴も五十年。サンキュウ・ヨンキュウの名コンビです。息の合ったお笑いに期待して、この銀河系を救いましょう」
　司会者が舞台の袖から紹介する。

「どうも、あたしがサンキュウです」
「そして、わたしがヨンキュウです」
「二人合わせて七級です」
「そんなん、合わせんでもええでしょう。普通、そろばんでも、剣道でも、囲碁や将棋でも、三級の上は、二級でしょう。合わせて七級や言うたら、なんか、各が落ちとるように思えますよ」
「それやったら、三千円と四千円を足したら七千円やから、数が多い方がええんとちゅうか。それとも、三千円と四千円を足したら千円になるんかいな」
「それは、単位がお金やからありまへんか。お金は多い方がええのに決まってますがな。級やったら、少ない方がええんと違いまっか」
「ほな、漫才師はどうやろ。一人よりも二人の方がええのかいな」
「一人では漫才はできやしませんで。漫談になってしまいます」
「それみなはれや。やっぱり、合わせて、七級の方がええんや」
「ちょっと意味が違いと思いますけど」
「それよりも、最近、眠れんで困っとんのや」
「話題を変えるんが早いですなあ。そう言えば、あんさん。夜中に、よう寝がえりうったり、水飲んだろ、トイレに行ったりしてますな。なんか、悩み事でもあるんですか。夫婦やから、何でも言うてえなあ。やっぱり、アンドロメダ星雲が銀河系にぶつかってくるんが心配なんですか」
「それも、心配やけど。それにしても、あんたはよう寝とるなあ。いつもガーガーといびきをかいとるで。アンドロメダ星雲がぶつかってくるんが怖うないんかいな」
「怖いんは怖いけど、なんぼ心配しても、アンドロメダ星雲はどこにも行かんのでっしゃろ。それやったら心配してもしょうがありまへんで。それよりも、あんた、なんぼ夫婦やから言うて、こんな大勢のお客さんの前で、あたしの恥をさらしてしもうたら、みんなに笑われてしまいますがな。せめて、いびきの音は、すーすーにしてくれませんか」

「そりゃ、すまん、すまん。訂正するわ。いびきはすーすー、よだれがずーずーや」
「いびきだけやのうて、よだれもたらすや言うたら、よけい悪いわ」
「ほかにも、目くそもつけとるし、鼻くそも飛び出しとるで」
「こんな可愛い奥さんに向かって、ようそんなこと言うわ」
「おかげで、お客さんがちょっとは笑ってくれたで」
「そうですか。それならかまいまへんわ」
「やっぱり、女は強いわ」
「それよりも、あんたが眠れんのは何が心配ですねん」
「いやあ、地下鉄や」
「地下鉄や言うたら、あの地下を走る鉄道ですか」
「わしが言うたんのそのままやないか。もう少し、色をつけんかいな」
「ほな、緑色の地下鉄ですか。それともオレンジ色ですか」
「その色やないわ。もうええわ。とにかく、地下を走る鉄道や」
「その地下鉄がどないしたんですか。トンネル事故でも心配なんですか」
「いやあ、地下鉄はどないして車両がはいったんか気になるんや。土の下やで。最初から車両を埋めっとんたんかいな。あんな大きな物、埋めるんは大変やで。それとも、埋めやすいように、地下鉄の卵を埋めて、それがかえったんかいな」
「地下鉄は機械ですよ。地下鉄の卵なんか聞いたことがありませんわ」
「そうかいな。こんなに技術が進歩した社会やから、地下鉄の卵があってもおかしくないかなと思うたんやけど」
「そんなんないわ」
「それやったら、やっぱり、地下鉄を作る前から、車両を埋めたんかいな。ちょっとでも手間を減らすために、横やのうて、縦に埋めたんかいな。それが気になって眠れんのや。それに、地下鉄を生き埋めにしたら、地下鉄は死んでしまわんかいな。酸素ボンベがいるで」
「地下鉄は生き物と違うから、埋めても死にはしませんわ。酸素ボンベもいりませへん。それに、縦にしろ、横にしろ、掘る体積は同じでっせ。心配せんでもいいです。地下鉄は地上から地下に向かってトンネルがあるんです。そのトンネルを通ったら、地下鉄につながっとんです。そんなん常識ですよ」
「それやったら、地上に出とる部分は地下鉄やのうて、地上鉄や。お空が見えるときは地上鉄で、トンネルに入ったら地下鉄や。その地下鉄が地上に出る時は、魚のはまちがぶりになるようなもんや。出世魚やのうて、出世電車や。めでたいこっちゃ」
「意味が違うと思いますけど。それに、地下から地上に出るんが、なんで出世なんですか？」
「七年間潜っていた蝉の幼虫は、地面に出てきたら、蝉になって空を飛べるやろ。わしらも、この地下鉄漫才で、売れんかった頃からようやく陽の目を見ることができたんやないか。ありがたい話や。地下鉄に足向けて寝られへんで」
「いやいや。地下鉄は地下やから、立ったまま寝ん限り、足は向けられしませんで」
「屁理屈を言うう奴なあ」

「それに、わたしらが蝉なら、この人気も一週間で消えてしまいますのんか？」
「もう、ええわ。サンキューでした」
「ヨンキュウでした。二人合わせて、ナナキューでした」
「お前も言うとるがな」
　サンキュウ、ヨンキュウは舞台から降りた。
「さあ、どうでしょう。十八番の地下鉄漫才でしたが、宇宙船が銀河系を飛び交う時代に、地下鉄と言っても、誰もピンときてはないと思えますが、さて、みなさん、いかかでしたでしょうか。さあ、笑い度は何点でしょう」
　司会者が場を盛り上げる。

「なあ、あんた。いつまでも、地下鉄のネタは古いんとちがいますか」
「そりゃあ、古いわ。.わしもわかってる。それでも、この地下鉄ネタで、少なくとも一世を風靡したんやで。このネタを出さな、客は納得せんのや」
「一世を風靡したは大げさですよ。蝉と同じで一週間を風靡したんと違いまっか」
「もう、漫才は終わったで。話は落とさんでもええで。それでも、このネタのおかげで、わしらは家も建てたし、子どもたちも大学へ行かせられたんや。いつ、仕事辞めても食っていけるだけの貯金はできたんや。他の人にとってｇ/はどうかわからんけど、わしら家族にとっては、一世を風靡したんや」
「そりゃそうやけど」
「それに、お客さんはこのネタを聞きに来とんのや。このネタを出さんかったら、暴動が起きるで」
「そんな大げさな。ネタがわかっとってもお客さんは聞きたいんですか？」
「そうや。ネタがわかっていても聞きたいんや。歌かてそうやろ。歌手で言うたら、ヒット曲や。ヒット曲は何回聞いてもええやろ。何回聞いても、歌詞は変わらんやろ。それに、歌詞が変わったら困るやろ。それと一緒や。むしろ、客は同じネタを何回も聞きたいんや。だから、何回聞いても、同じネタで客は笑うんや。同じネタで笑いたいんや。それに、このネタは、誰もが持っている疑問やけど、こんなこと言うたら笑われてしまうような疑問を、漫才師のわしが、客の身代りになって笑われながら、口に出しとんのや。だから、お客さんは支持してくれるんのんや。まあ、この疑問は人間の業をあらわしとんのかもしれんな」
「業ですか。あんたはんにしては、えろう難しいこと言われますなあ。ほな、落語と一緒ですかいな」
「そうや、同じや。笑いは人間の業や」
「ほな、伝統や歴史も業ですか。わたしらは、骨董品ですか」
「そうや。ええこと言うわ。人間自体が業や。最後の骨董品だけよけいやけどなあ。わしらには価値がないんやで。価値があるんは、同じネタで笑える時代があって、共に生きたということや。同時代を笑いながら生きたという事実や」
「よけいに難しくなりましたで」

「まあ、ええわ。とにかく、かえろ。帰って、地下鉄ネタを磨かなあかん。骨董品も磨いたらちょっとは価値が上がるやろ」
「笑いの点数は気になりまへんか」
「自分たちが一生懸命やっていたら、結果は後からついてくるで。後ろから地下鉄の列車が来たら轢かれてしまうけどなあ」
「今のギャグが一番面白かったですよ。ほな、帰りましょう」
　二人は手をつなぎ、楽屋を経ないで、寄席から出て行った。もちろん、家までの帰りは地下鉄で。ちゃんと定期券は持っていた。
　その頃、舞台では。
「出ました。最高得点です。地下鉄ネタは、まだ、地下では眠っておらず、日の当る場所にいました」と、司会者の声が会場に、地球に、銀河系に広がった。

## 七　赤の他人　毒舌漫才

「さあ、トリは、銀河系一の漫才コンビ、ワンツーです。どうぞ」
　舞台の裾から、司会者が紹介する。音楽に合わせて、舞台の上手、下手から、別々に漫才師が登場する。曲は「三百六十五歩のマーチ」だ。
「はい。どうも。私がワンです」
「私がツーです」
「二人合わせて、ワン・ツーです」
「何や、行進しそうな名前やな」
「それ、ワンツー、ワンツー。怠けないで、歩け」
「何で、怠けないで、行進せなあかんのや」
「行進しとったら。道路にお金が落ち取るんかもしれんやろ。その人生最大のチャンスを逃がしたら、もったいないやろ。だから、行進を怠けたらあかんのや」
「それは、せこい話やなあ」
「それ、ワンツー、ワンツー、ワンツー、ワンツー」
　舞台の上で、歩きだすツー。
「何、行進させるんや」
「どうせ、お前はお笑いはできんのやから、そこで、行進でもしとけ」
「そんなこと言うもんじゃ、ありません」
「話は変わるけど、これまで登場した芸人たちは、夫婦や親子や兄弟たちやったけど、俺たち二人は赤の他人なんです」
「そう、赤の他人」
「そう、特に、こいつは、一か月に一回しか、風呂に入らないから、体中、垢でいっぱいです」
「そんなこと、言うもんじゃありません。風呂に入るのは、年に一回です」
「よけい、垢まみれやないか。半年に一回ぐらい入れよ。でも、その垢だらけの体、ほんまにうらやましいわ」
「なんで、垢だらけの体がうらやましいんや」
「どこか、見知らぬ星へ行って、道に迷っても、垢をこすりながら、落としていったら、目印になって、無事、元の場所に戻れるで。ほんま、うらやましいわ」
「私の垢はパンくずですか。垢を鳥に食べられたら、戻って来られないじゃないですか」
「お前の垢なんか食べる鳥がおるか。もし、万が一食べたら、食中毒で死んでしまうわ。ほんでも、死んだ鳥を目印にして、元の場所に戻って来れるで」
「そんなこと言うもんじゃありません。お客さんが、ほんまのことと思って、信用するじゃないですか」
「おっ、ちょっとパターンを変えたな。言葉を追加しだしたじゃないか。そんな言葉いつ覚えたんや」

「そんなこと言うもんじゃありません。二人で、漫才やってるんじゃないですか」
「話は変わるけど、アンドロメダ星雲がやってくるやろ」
「また、話が変わるんですか。巷では、そんな噂が出てますね」
「噂やないで。ほんまのことや。俺、今まで、アンドロメダ星雲へ行ったことがないんや」
「そりゃあ、あんな遠いところへは行けませんね」
「それが、ほっといても、向こうからやってくるんや。これは、チャンスやで」
「何がチャンスですか。旅行やないですよ。遊びで、アンドロメダ星雲が来るんと違いますよ。銀河系にぶつかるんですよ。そうなったら、銀河系はこっぱ微塵に砕けてしまいますよ。銀河系だけじゃないですよ。あなたもわたしもこっぱ微塵ですよ」
「よっ、すごいな。長セリフじゃないか。かなり進歩したなあ。よく覚えきれたなあ」
「そんなこと言うもんじゃありません」
「ぶつかると言っても、全部が全部、ぶつかるんと違うやろ」
「そりゃあ、銀河系を通り過ぎる星もあるでしょう」
「そこや。その時や」
「何がその時ですか」
「アンドロメダ星雲のいくつかの星が銀河系を通り過ぎる時に、その星に飛び移るんや。そうすれば、タダで旅行ができることになるで」
「どうやって、飛び移るんです」
「そりゃあ、アンドロメダ星雲行きの地下鉄に乗るんや」
「地下鉄はアンドロメダ星雲につながっていないでしょう。他人のネタを使ってはいけません。もし、星に飛び移れても、星がそのまま銀河系から離れたらどうするんです」
「それやったら、そのままその星に住めばええんや。旅行だけでなく、土地まで、タダでもらえるで。ほら、飛び移れ」
　ワンの掛け声に、ツーが星に飛び移ったふりをして、舞台の端に歩いていく。
「うまいこといったな。もう、二度と銀河系に帰ってくるな。これで、お笑いコンビも解消できるわ」
「そんなこと言うもんじゃありません」
　慌てて、舞台の中央に戻るツー。
「さあ、皆さんも、家族や会社や近所の人をそそのかせて、アンドロメダ星雲に飛び移らせましょう。そうすれば、銀河系が平和に、過ごしやすくなります」
「そんなこと言うもんじゃありません。アンドロメダ星雲は、姥捨て山ですか」
「姥捨て山やて、そんな古い言葉、よう知っとるな」
「そんなん、誰でも知ってますよ」
「それなら、お前が捨てられたら、ツー捨て星や。チャン、チャン」

　コンビが舞台から下りた。

「お疲れさまでした」
　マネージャーがやってくる。
「ワンさん。次の仕事は、一時間後にテレビの生放送です。時間がありません。急いで着替えをしてください」
「ああ、そう」
　ワンは気乗りなさそうに答え、ソファーに座り込んだ。明らかに疲れている。毎日、分刻みのスケジュールだ。食事も移動中の車の中で過ごすことが多い。楽屋にも入らず、そのままテレビの番組に立つこともある。
「それじゃあ、急がなくちゃ」
　ツーが慌てて衣裳を脱ごうとする。
「あっ、ツーさんは、急がなくていいですよ」
「えっ、どういくこと？」
マネージャーはワンの舞台衣装を脱がしている。
「仕事が入っているのは、ワンさんだけです。ツーさんは、この仕事で、今日のスケジュールはお終いです。家に帰って、ゆっくりしてください」
「ええ？ゆっくりしろと言われても、俺、まだ、全然、体力的に大丈夫だよ。ほら、イチ、ニ、サン、シ、イチ、ニ、サン」
　ツーが首や肩を回し、ラジオ体操を始める。
「ツーさんの体が大丈夫でも、スケジュールがはいってない以上、仕事はないですよ」
「そんなあ。そんなこと、言うもんじゃないです」
「さあ、ワンさん行きますよ。車の中で軽い食事でも摂りましょう。少しは元気がでますよ。栄養ドリンクもあります」
「ああ」
　けだるく立ち上がるワン。ワンとマネージャーは楽屋から立ち去った。一人残されたツーは、劇場の外で、ワンの乗った車を見送った。そして、空を見上げ、遥か彼方のアンドロメダ星雲の姿を見つけようとした。しかし、星雲の姿はわからなかった。ツーは思う。どんなことがあっても、このまま、地球にとどまろうと決心した。いや、正確にいえば、地球に残らざるを得なかったのだ。

## 八　銀河系人は皆兄弟　師匠登場

「さあ、銀河系最高のお笑い芸人たちの舞台が終わりました。得点は・・・」
　司会者が声を上げると、それを遮るように、舞台には、座布団が敷かれ、三味線と太鼓の音に合わせて、着物姿の男が現れた。
「あれ、進行表では終わったはずなんだけど」
「この放送を見ていた師匠が来られてなあ。わしも銀河系星人の一人やから、兄弟のために何か力を貸したいんやと言われてな」
　番組プロデュサーが司会者の横に立つ。
「いいんですか」
「いいも悪いも、師匠が高座に上がると言われたんだ。ありがたい話だ」
「じゃあ。進行をしましょうか」
「師匠におまかせだ。我々の出番じゃない」

　舞台の上では、師匠が座布団に座り、しゃべり始めた。
「ええ、まいど馬鹿馬鹿しい話をひとつさせていただきます。まあ、これまで、六組ですか、馬鹿馬鹿しい話がありましたのに、何を今さら、とお思いでしょう。それでも、馬鹿馬鹿しい話は、ひとつ聞くとすぐに忘れてしまうので、何度聞いても、新鮮で、初めて聞いたように思うものなんです。
　おい、はっちゃん。昔、銀河系にアンドロメダ星雲がぶつかりそうだった話を知っているか。
　大家さん。それ、本当ですか。そりゃ大変だ。逃げなきゃ。
　おい、おい。逃げなくてもいいよ。だいぶ昔の話だよ。
　昔の話ですか。驚かさないでくださいよ。大家さん。それで、アンドロメダ星雲って、何ですか。
　おい、おい。アンドロメダ星雲も知らないで、逃げようと言うのかい。
　アンドロメダ星雲だけじゃなくて、銀河系も知らないんですけど。
　何、銀河系も知らないのかい。銀河系は、今、お前が住んでいるところだよ。
　へえ、俺が住んでいるところは近所の横丁だと思っていましたが、源氏名は銀河系ですか。夜になると、ちょいと一杯です、きれいどころがお酌でもしてくれるんですか。
　何が、きれいどころだ。何が、ちょいと一杯だ。昼間から、寝ぼけてんじゃないよ。それに、星に、源氏名なんかあるもんか。
　へえ、すんません。ちょっと、調子に乗ってしまいました。それで、銀河系にアンドロメダ星雲がぶつかりそうだった話ですが、どうやって食い止めたんですか。
　聞きたいか。
　聞きたいです。
　じゃあ、教えてやろう。笑いだよ。
　銀河系にアンドロメダ星雲がぶつかるのに、何で、笑いなんですか。

ぶつかることが笑いじゃないよ。ぶつかることを笑いで食い止めようとしたんだよ。
笑いで、星がぶつかるのを食い止めることができるんですか。
そうだよ。わしも信じられんが、そういうことがあったそうじゃ。
どんなふうに、食い止めたんですか。
銀河系の中で優れた笑いの芸人が集まって、銀河系中の人を笑わせて。その笑い声でアンドロメダ星雲を吹き飛ばそうと言うんじゃ。
笑い声でアンドロメダ星雲を吹き飛ばすんですか。
そうじゃ。
そんな馬鹿な。それこそお笑いじゃないですか。
まあ、話を聞け。これから話すからな。
へえ。大家さん、笑いながら聞いてもいいですか。
そりゃあ、もちろんだ。何しろ、お笑いだからな。

## 九　そして一人

　師匠の高座が終わった。
「さあ、銀河系最高のお笑い芸人たち六組とトリを務められた師匠の計七組の舞台が終わりました。最後の師匠の得点は・・・」
　電光掲示板が動く。
「数字が出ました。一桁から順に、〇、〇、〇、〇・、あっ」
　司会者の驚きの声とともに、電光掲示版が燃え上がった。
「こ、こ、こ、これはどういうことでしょうか」
　ブオオオオオン。
　銀河系に莫大な笑いが起こった。その笑いから、観客の息が放出された。息は竜巻となり、アンドロメダ星雲にぶち当たった。アンドロメダ星雲は二つに大きく分れ、銀河系の星とアンドロメダ星雲の星は衝突することなく、アンドロメダ星雲は、銀河系を素通りしていった。おかげで、銀河系の人々は、これまでと同じ生活をすることができた。ただし、これをきっかけに、年に一回、更なる、お笑いの技術発展を目指して、銀河系お笑い選手権大会が開催され、銀河系中に放映されることになった。このお笑い選手権大会については、後日、機会があれば、お話ししたいと思う。

「どうでしょうか。今度の、「笑いは銀河系を救う「お笑いバトル合戦」」の台本なんですが・・・・」
　私はプロデューサーの秋本の横顔を見た。足を組んだまま、一通り、台本に目を通した秋本は、まあ、考えておくよ、と言うなり、私の台本を机の上に放り投げた。
「でも、さあ。これ、なんで、関西弁なの。銀河系の人類は、みんな、関西弁なの。それに、関西弁にしては、ちょっと田舎なまりが入っているようなんだけど」
「いやあ。個人的に関西弁が好きなのと、私自身、関西の生まれじゃないんで、つい田舎の言葉が混じるんです」
「まあ、それはいいけど。それに、笑いで銀河系を救うと言われてもねえ。ほかに、何か、もっと、現実的なものは救えないの。世界では、イスラム国の勢力拡大やエボラ出血熱の流行とかで困っているでしょう。日本だって、少子高齢化で自治体が消滅するとか、認知症患者の徘徊やデング熱の発症などが問題になっているでしょう」
「はあ。銀河系を笑いで救えれば、世界や日本の問題も解決できるんじゃないかと思いまして。笑いの壮大な力を信じているんです」
「壮大な力ねえ。あんたが力を信じていても、一般の人は、そんな力を信じてなんかいないよ。なんか、リアル感がないんだよね、この台本。笑いで銀河系を救うと言われても。まあ、もう、一回読み直してみるよ」
「続編の「銀河系お笑い選手権大会」の台本もあるんですけど」
「まずはこのホンからだよ。あんまり、期待しないでね」

　そんなこと言うもんじゃないよ。と、私は心の中で呟きながら、それを口に出すこともできずに、じゃあ、よろしくお願いします、と、頭を下げ、プロデューサーの部屋から出た。
　外はもう真っ暗だった。空を見上げると、星が輝いていた。七つの星だ。お笑い北斗七星だ。遥か彼方の星では、一体、どんな笑いが受けているのだろう。流行っているのだろう。
　全宇宙までとは言わないまでも、銀河系とは言わないまでも、全世界までとは言わないまでも、日本中とは言わないまでも、せめて、この地域だけでも、自分の作品が笑ってもらえ、その結果、笑いの力で、地域や日本、世界、銀河系の問題が解決して欲しいと、お笑い北斗七星に願いながら、私は一人で家路に向かうのであった。